

蔵前俳句会創立 100 周年記念大会への祝辞

(20160521 百年記念館フェライト会議室) 広瀬茂久

蔵前俳句会関係の皆さん、創立 100 周年及び記念誌(図①)の発行おめでとうございます。記念すべき大会のお手伝いをさせていただき、また、このように挨拶の機会を与えて頂きましたことに、資料館を代表してお礼を申し上げます。

この日を一番楽しみにしておられたに違いない高瀬昭三会長が、つい先日、5月9日に急逝されたことは大変悲しく残念です。謹んでお悔やみ申し上げます。

本学の源流は 1881 年に設立された東京職工学校ですが、敷地は蔵前にあった文書館(書籍館・浅草文庫)の跡地でした。それがどの程度影響したかは分かりませんが、文芸を愛する校風が生まれ、「高等工業」そして「東京工業大学」へと受け継がれてきました。その一翼を担ったのが「文芸部」や「蔵前俳句会」の人たちでした。皆さんを勇気づけるエピソードが残されていますので紹介します。

芥川龍之介の 講演デビューの舞台は蔵前でした⁽¹⁾

1919 年(大正 8 年)6 月 4 日に文芸部の中原虎男が芥川龍之介(1892~1927、②)を訪ねて講演を依頼しました。27 歳だった芥川は日記に「平に御免を蒙る」と書いていますから、あっさり断られてしまいました。トラとリュウの闘い、トラは虎男、リュウは龍之介ですが、両者の闘いはリュウに軍配が上がったわけですが、虎男は 4 日後に再び龍之介を訪ね、今度は少々戦略を練って、俳句談義をした後でおもむろに講演を依頼し、引き受けて貰うことに成功しました。

表現形式を重んじる芥川龍之介は、内容重視の当時の文壇では異端視されていたようですが、この点を虎男はうまく利用したのです。龍之介は次のように考えていました:「我が国に昔からある俳句には、種々難しい規約や、形式があるが、それゆえに、俳句では作者の主観を通じて自然と人生を再現できるのである」と。このような俳句談義をしたあとで、「是非そのようなお話を蔵前で」と頼まれればいくら芥川龍之介でも断れなかったのです。6 月 8 日の日記には、「午前高等工業学校の中原氏来訪。俳談を少々やる。しまひに例の講演を頼まれ遂に承諾す」と書かれています。もう一つ感心したのは、お礼にサクラamboを届けている点です。6 月 24 日の日記にはこう書かれています:「留守中に 中原虎男君 来たり、桜ん坊を一箱くれる」。蔵前のトラは礼儀作法も身に付けていたと言えそうです。

芥川龍之介の講演は 1919 年(大正 8 年)6 月 28 日(土曜日)の午後に「小説の読み方」と題して、行われました⁽²⁾。「小説の内容は種々様々で、作品の意図している内容を正確にくみとって読まねばならぬ。作家がその作品に込めた意図を越えた

所で批評すべきではない。また、次には、その意図された内容が形式によって、どれ程完全に表現されているかが問題となる。...“内容が幹で形式は枝葉末節だ”という説が流行している。が、それは本当らしい嘘だ」というように論を展開しています。俳句は文学表現の究極の姿と思っていたのかも知れません。

最後に強調しておきたいのは、この講演が芥川龍之介の最初の講演として歴史的にも重要な点です。一般的には、芥川の最初の講演は、東京日日新聞の主催で 1919 年(大正 8 年)11 月 8 日に神田青年会館で菊池寛らと一緒に行ったものが最初とされていますが、実際にはそれより 4 カ月近くも早く蔵前で講演をしていたのです。しかも、そのきっかけが今から 97 年前の俳句談義だったことは皆さんにとっては嬉しいことではないでしょうか。

◆今日は日本女子大 OG の立葵会の皆さんも来てくださっていますので、女性と俳句の話もさせて頂きたいと思います。

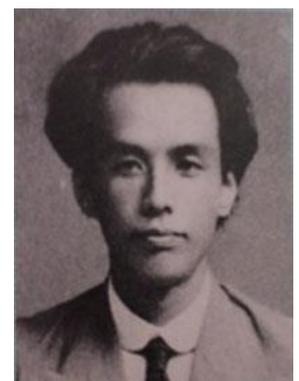
17 世紀末から 19 世紀にかけて、全国各地に多数の女性俳諧師がおられたそうです。1700 年(元禄 13)年に、日本の文芸史上初の女性撰集を出版したのは、小さな八幡宮宮司の妻でした。その時代に、一般庶民の女性の多くが創作に打ち込み、出版物を発行するという文化は、世界でも類を見ないそうです。女性が言語能力に優れ、お喋りなのは、乳飲み子を抱っこしながら、子供に言葉を教える母親の役割を考えると極自然でよく納得できます。

◆とりとめのない祝辞となってしまいましたが、志を果たして今こうして母校で我が人生を振り返っておられる方々に、「おくの細道」の冒頭の部分を捧げて結びとさせていただきます。

月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上
に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかふる物は、
日々旅にして旅を栖とす。

(1) 石割 透, “芥川龍之介「紅葉」紹介など”, 駒沢短期大学研究紀要 10, 65-72, 1982.

(2) 浅草文庫 第 46 号の巻頭, 大正 8 年 11 月 30 日発行。



① 蔵前俳句会 句集 (IV) ② 芥川龍之介 (20 代後半)